

# 種しゅの概念

生物のことを考えるとき、私たちは「種しゅ」という言葉をよく使います。

しかし、なにをもって「種」と定義しているのでしょうか。

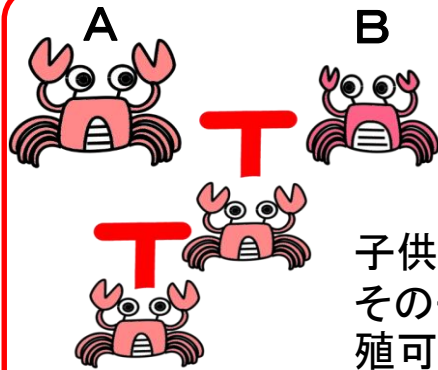
生物の「種」という言葉は多くの人にとって聞きなれた言葉でしょう。しかし、なにをもって「種」とみなすかについて、様々な考え方があることはあまり知られていません。

たとえばAという個体とBという個体がいたとき、これが同種であるか別種であるかはどうやって判断すればよいでしょうか？多くの方は、色・形などの形態を見て判断するでしょう。このように形態の違いによって種をわける考えは「形態的種概念」と呼ばれます。

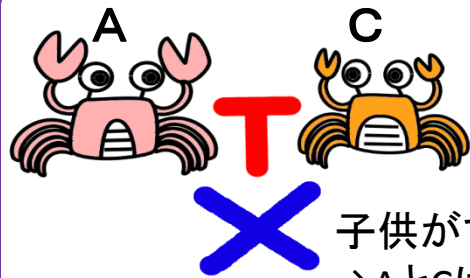
多くの場合、この考え方は有効なのですが、どの特徴に注目するかは人によって様々なので、やや主観的な分類になってしまうことがあります。

そこで、現在では「生物学的種概念」という考え方が一般的とされています。これは、「自然条件下でAという個体とBという個体が繁殖でき、さらにその子供も繁殖可能であれば同種とみなす」という考え方です。これならば、実験によって確かめることが可能となり、非常に客観的な分類を行うことができます。

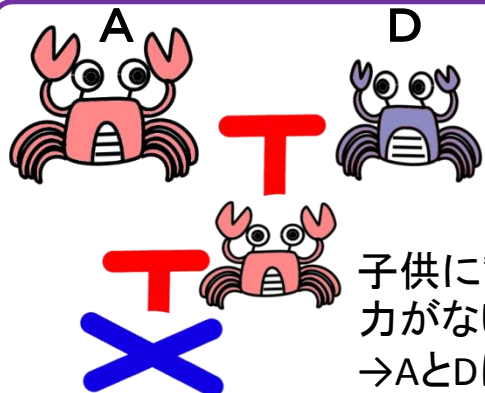
## 生物学的種概念



子供ができて、  
その子供も繁殖可能  
→AとBは同種



子供ができない  
→AとCは別種



子供に繁殖能力がない  
→AとDは別種

しかし、生物学的種概念にもいくつか欠点があります。

まず、すでに絶滅してしまった生物を交配させることはできないので、化石種に適用できません。

次に、無性生殖しかしない生物に関して、定義を直接当てはめると、それぞれの個体が別種になってしまうという問題が生じます。

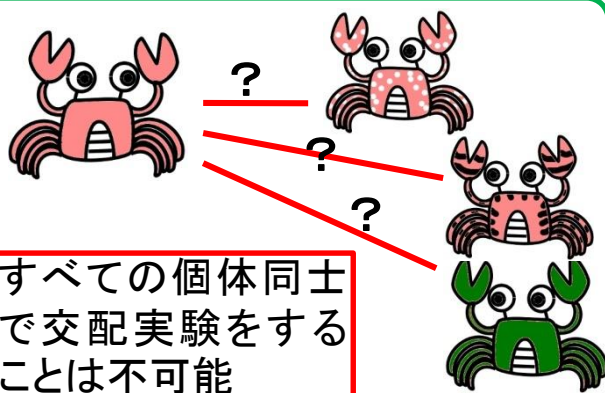
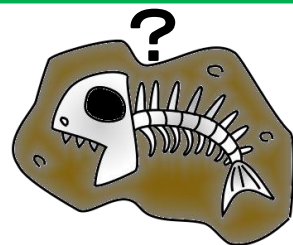
また、現実問題として、すべての生物同士で交配実験を行うことは、手間や技術面を考えると、明らかに実現不可能である、という点も挙げられます。

生物学的種概念の他には、例えば、生物同士の生息域・行動などの生態的地位に注目して種を認識する「生態学的種概念」、生物の系統関係に注目し種を認識する「系統学的種概念」などが考えられています。しかし、それぞれ一長一短で、「種」を明確に定義できる方法はまだなく、今後発明されるかは不明です。

種を定義する場合、一つの種概念だけにこだわると適用できない事例が必ず発生してしまうので、状況に応じて複数の種概念を使い分けることになります。

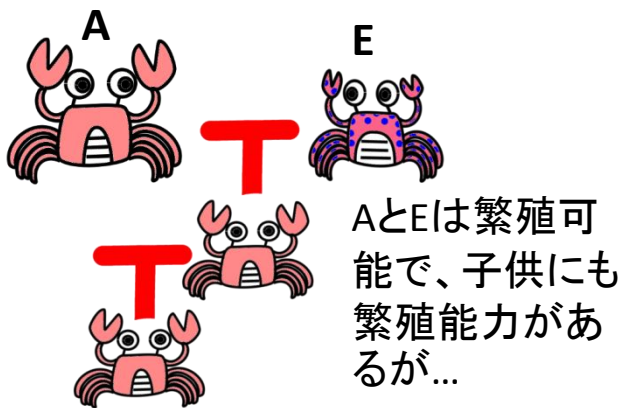
## 生物学的種概念の様々な問題点

化石種を交配させることは不可能なので、検証できない



すべての個体同士で交配実験を行うことは不可能

## 生物学的種概念以外の種概念



AとEは繁殖可能で、子供にも繁殖能力があるが...

### 生態学的種概念

AとEの生息地は地理的に隔離されており、エサなども大きく異なるため別種とする